

## 令和7年度「熊本の学び」研究指定校事業 事業実績報告書

### 1 研究の内容

授業力向上（○）・道徳教育（ ）・キャリア教育（ ）・特別活動（ ）  
カリキュラム・マネジメント（ ）・その他（ ）（内容： ）

### 2 学校の概要

（単位：人）

プロジェクト校（研究指定校）	児童生徒数	教員数	校長名	研究主任名
宇土市立宇土東小学校	261名	23	太田黒 保宏	戸澤 義博

### 3 研究主題

「“できた” “分かった” と子供が輝く算数科授業」

～子供も教師も“わくわくする”授業づくりを目指して～

### 4 研究主題設定の理由

開校以来、算数科の指導方法について研究を続けている。対話活動の充実に重点を置き授業改善を行う中で自らの考えをもち、論理的に表現できる児童が増えている。一方で、自分の考えをもつことができず、学習への意欲に課題が見られる児童がいるなど、二極化が進んでいる。

算数の学習に対する意識調査では、約7割の児童が「算数の授業は楽しい」「算数の授業では学習したことが分かるようになっていく」と回答している。それに対して「学び合いの時に、友達の考えを聞いて、そこから自分で考えたことや思ったことを伝えている」と回答する児童は約6割と少ない。意欲的に取り組む児童が増え少しずつ学力の向上が見られている反面、自分の考えを周りに伝えようとするに課題があり、学習内容の定着が不十分な児童も見られる。

これらの結果を踏まえ、子供の「わくわく」が連続し、「分かった」「できた」「もっとやってみよう」が生まれる授業づくりを行うことで学習意欲を高め、思考力・判断力・表現力を育てる取組を展開することにした。

### 5 研究の具体的な取組内容の実際

#### （1）子供の「なぜ」「おそらく」（疑問や予想等）が生まれる導入の工夫

子供たちが疑問をもつ教材、驚きや発見がある教材、矛盾や困惑、葛藤を引き出し心ゆさぶる教材などとの出合わせ方を工夫し、子供に「問い」をもたせる。

その際、「『問い』を自分事として捉えることで学びに向かう力が高まる」、「『問い』を発する経験を積むことで学習を見通す力が高まる」という視点での教材との出合わせ方を工夫する。

#### （2）子供の「やってみよう」「なるほど」「きっと」（挑戦や納得等）が生まれる展開の工夫

学年段階に応じた話し合いの仕方を工夫し、考えを伝え合う（学び合う）話し合い活動を充実させ、主体的・対話的で深い学びとなるよう工夫する。

その際、子供たちに伝え合う必要性を感じさせる。また、共通点や相違点に気付かせたり、新しい見方・考え方に気付かせたりする教師のコーディネートの方を工夫する。

### (3) 子供センタード

本校では、昨年度“より多くの子供たちに活躍の場を”というテーマで、6年生を中心に児童が主体となって活動する場を多く設けた。その中でも、6年生が他の学年の研究授業（1～5年生）を参観し、授業研究会に参加することを通して、子供たちの声に耳を傾け、授業づくりや改善に生かすことができた。今年度は、“子供センタード”をテーマに、参観する児童を高学年全体に広げることでこれまで以上に多角的な声を聞き、より一層の授業改善に役立てていけるようにする。さらに、子供が教師への評価を行う「算数アップ」を書くことで、低・中学年の子供の声も聞く場を設けるようにする。

### (4) 一人一人が主体となる授業研究会

前述したように授業研究会には児童が参加するため児童を含めた協議の後、教師同士で協議する時間を設けていく。そこでは、児童の声を受けて次時の展開（授業内容など）をどのように改善していくかについて協議する場とする。研究会の最後に職員全員が振り返る時間を設定し、今後の実践事項を全体の場で共有するようにする。

## 6 目指す成果【検証方法】

- 算数の学習に対する意識調査で「算数が楽しい」「算数の授業で学習したことが分かるようになってきている」と答える児童が増える。【実態調査アンケート】
- 算数の学習に対する意識調査「算数の時間に自分の考えを伝えている」と答える児童が増える。【実態調査アンケート】

## 7 研究実施の実際

時 期 (月)	実施内容
令和7年 5月	「熊本の学び」研究指定2年目 算数科提案授業
令和7年 5月	提案授業を受けての専門部会
令和7年 6月	算数科 高学年部 大研 授業研究会
令和7年 7月	算数科 各学年部 小研 授業研究会
令和7年 9月	算数科 低学年部 大研 授業研究会
令和7年 9月	算数科 低学年部 大研を受けての専門部会
令和7年 10月	算数科 各学年部 小研 授業研究会
令和7年 11月	算数科 中学年部 大研 授業研究会
令和7年 11月	算数科 中学年部 大研を受けての専門部会
令和7年 12月	算数科 各学年部 小研 授業研究会
令和7年 12月	算数科 研究発表事前授業 授業研究会
令和8年 1月	「熊本の学び」研究発表
令和8年 2月	「熊本の学び」研究発表反省

## 8 市町村教育委員会の取組の実際

- 円滑かつ効果的な研究の推進に向け、必要な支援を実施した。具体的には、主任指導主事を中心にして年度当初からの中研や大研、公開授業前の小研や事前打合せ等に参加し、授業者や研究主任、管理職に対して指導・助言を行うとともに、学校教育指導員による年間を通じた授業参観等で各職員や管理職へ個別の指導・助言を重ねた。
- 研究内容の市内小中学校への発信及び共有を図るため、市教育委員会で開催する定

例園長・校長会議や教頭研修会、学力充実推進会議等において情報提供や公開授業への参加依頼を繰り返し行った。また、公開授業当日は、市教育委員会の関係者とともに、市内全ての小・中学校から数名ずつ教職員が参加し、研究の成果や課題、自校への活用等を協議する場を設けた。さらに、公開授業実施後は、定例園長・校長会議や学力充実推進会議等の中で研究内容の紹介、各校での実態に応じた積極的な活用の依頼等を行った。

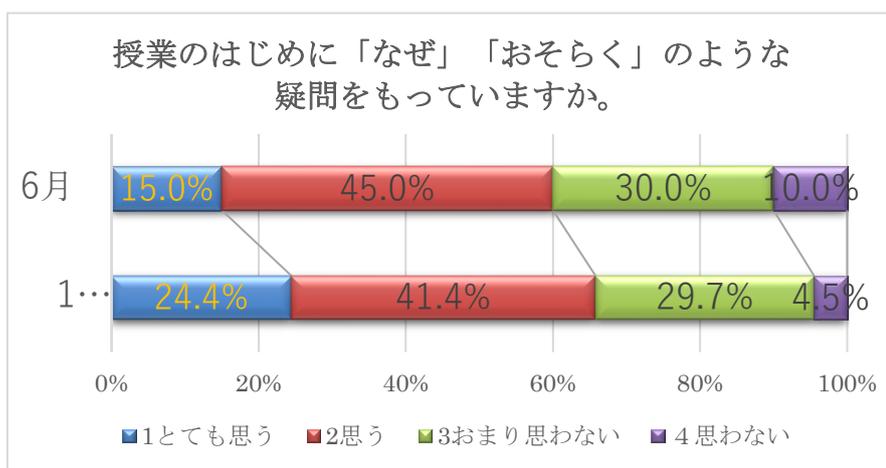
## 9 研究の成果【検証方法】

「“できた” “分かった” と子供が輝く算数科授業」を目指し、児童自らが問いをもち、主体的に考えをつなぐ対話活動を取り入れた授業を共通実践事項として取り組んだ。本校では、本年度、“より多くの子供たちに活躍の場を”のテーマの下、6年生を中心に児童が主体となって活動する場を多く設けた。算数科の授業づくりにおいて6年生が他の学年の研究授業を参観し、授業研究会にも参加した。また、教師への評価を子供が行うことで子供の声を聞く場を設け、授業改善に役立てた。

### (1) “なぜ” が生まれる導入の工夫

導入の工夫では、教師の仕掛けによって感覚や既習内容とのずれをつくり出し、子供が問いをもちことにつなげた。授業の導入部で児童が問いをもちたために教師の仕掛けを用意しておいた。1年生「3つのかずのけいさん」では、このままの解き方では立式ができないことを確かめ、「あれ、おかしいぞ」「どうやったらいい？」などのような問いが出てきた。また、5年生「直方体や立方体の体積」では、既習とのずれに着目する中で、「どんな方法でできるかな？」という問いが出た中で、「4年生のL字型に似てないかな？」のように、既習内容とつなげた問いをもちることができた。

また、教師の仕掛けにより問いをもちた児童が、自力解決の際に解き始められるように見通しをもたせることが大切だと考えた。そこで、見通しをもてる具体的なめあてを記述することで、全員が同じスタートを切ることができるように全職員で共通理解を図った。



授業の導入において、教師の仕掛けにより既習とのずれを生み、問いをもちことにつなげた。(下記詳述) また、めあてを児童と共に考え、より具体的な見通しをもった表記にすることにより、一人で自力解決を始められる児童が増えた。これらのことにより自ら問いをもち、探求しようとする児童が増えたと考察される。

### 【子供自らが問いをもちたために】

(◎教師が用意する工夫) → (子供がもちた問い)

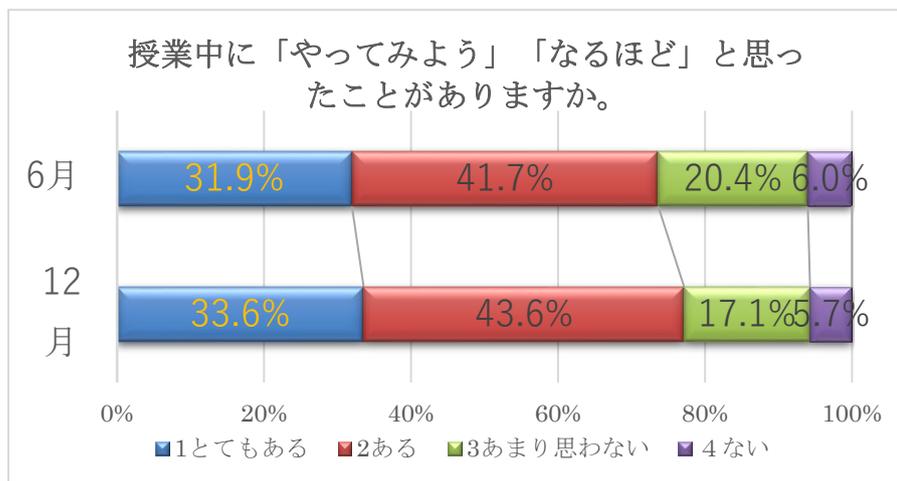
◎既習とのずれ → 「これまでとちがうぞ?」「どうすればいいかな?」「何が使える?」

◎生活経験とのずれ → 「あれ?おかしいぞ?」「あれに全部が入るかな?」

◎意図的な仕掛け → 「このままじゃ、できないぞ?」「どう変えればいいかな?」

## (2) “やってみよう” が生まれる展開の工夫

展開の工夫では、自力解決の見通しが立った後、解決方法を自ら選び取るようにした。必要に応じて具体物や図などを用いて数の表し方や計算の仕方などを考察し、実際に解決したり、結果を確かめたりする活動を通して、自ら算数を学び続ける楽しさを実感できるようにした。3年生「大きい数のしくみ」では、数が大きくなった場合の考え方をコース別に分類し、自ら選択してスタートできるようにした。また、自力で考える、同じコースで集まる、ヒントカードをもらうなど、自分で学び方を選択し、進めていけるようにした。



自力解決をスタートする際に選択できるコースを用意したことで、自ら学習内容を選び取る経験を多く積むことができた。また、算数アップで「話し合いの時間がもっとほしい」という声が多かったことを踏まえて授業改善を進めた。話し合い活動では、子供同士の発言の中で新たな問いが生まれ、児童の「やってみよう」のような意識の高まりが見られた。

## (3) 子供センタード

6年生を中心に児童が主体となって活動する場を多く設けた。具体的には、運動会の計画や練習を全て児童が進めたり、三部会という職員会議に毎回委員長が参加したりという取組があった。その中でも、算数科の授業づくりにおいて高学年生が他の学年の研究授業を参観し、授業研究会にも参加した。また、教師への評価を子供が行う算数アップ（下記に例示）を書くことで子供の声を聞く場を設け、授業改善に役立てていった。

### 【算数アップ：導入時】

- ・人形など身近な問題がよかったから。
- ・いろいろな質問や選択肢がでていたから。
- ・カップ、ペットボトルを用意し、実際に見て比べられたから。
- ・いろいろな式や考え方が出てきたから、どれでしょう、試してみたくなったから。

### 【算数アップ：展開時】

- ・お助けマンなどがあるから、安心して説明や発表ができそうだったから。
- ・間違えている人に教えていて、その人も友達のを考えを生かすことになっていたから。
- ・ペットボトルを見て想像ができてから、解けそうと思いやすくなり、問題を解きたくなる。

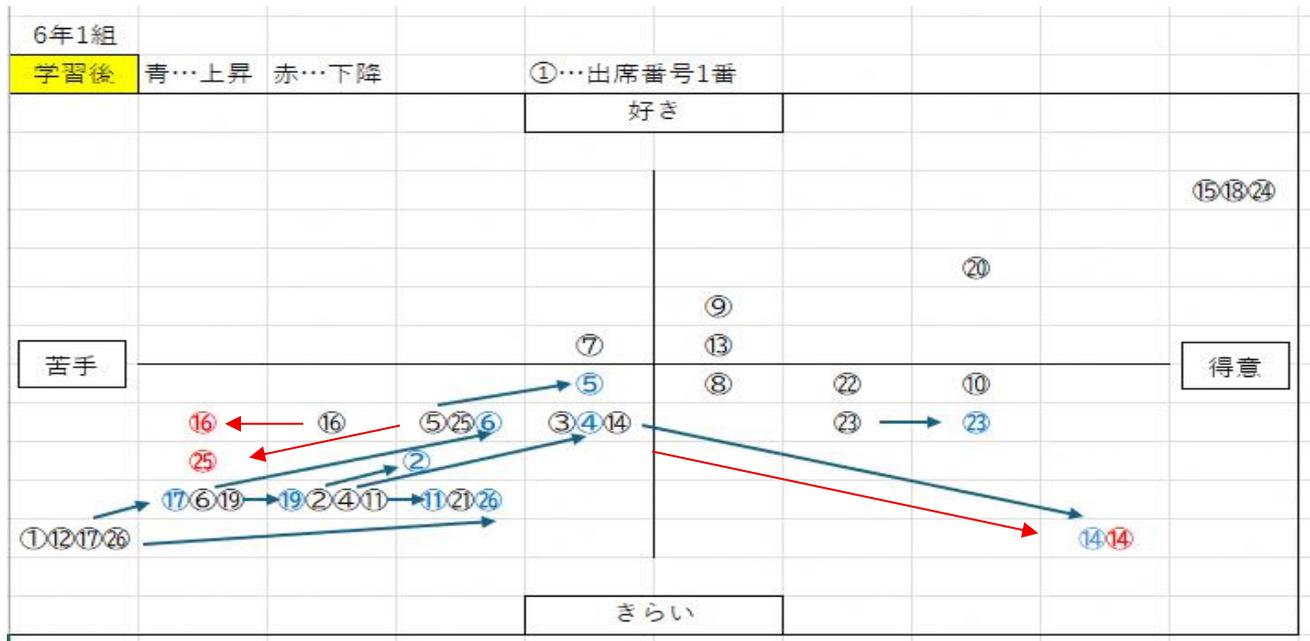
## (4) 一人一人が主体となる授業研究会

授業研究会の最後に職員一人一人が振り返りを記入する時間を設けた。子供から挙げた声を自分がどのように授業改善に生かしていくのか考えることを通して、「自分ごととして捉える授業研究会」として進めた。

### 【授業研究会に参加した子供たちの声】

- ・丸読みのように筆算を言っていく。・手元に考え方の図があるといい。
- ・発表する人が同じ人ばかりで進むのもっとたくさんの人が発表できるといい。
- ・グループで話し合う時間がもっとあった方が安心して発表ができる。
- ・練習問題が一つしかなかったから、確認の問題があってもいい。
- ・子供たちで進める授業をもっとしたい。

下に示すものは、算数アップ（子供の教師への評価）をもとに、子供の意識の変容をグラフ化したものである。縦軸が「好き・きらい」、横軸が「得意・苦手」の意識を10段階で記している。単元の学習前と後の意識の変化とその要因についてまとめた。なお、数字は出席番号、青が上昇、赤が下降、黒は変化が無かったことを表している。



### 10 研究の課題と今後の展望

#### (1) “なぜ”が生まれる導入の工夫について

教師の仕掛けを各職員や学年部で考えていたので、その類型化や共有を全職員に周知徹底していく。また、具体的な見通しをもつためのめあてを児童とともに考えていくことが難しい場面があったため、研修や実践例を共有しながら学校全体で進めていきたい。

#### (2) “やってみよう”が生まれる展開の工夫

全ての児童が自分なりの考えをもち、学び合いに向かえるようにと実践を重ねてきたが、全体学びの場での対話が一部の児童で進められることがあり、より多くの児童が主体的に学び合いに向かうことができる手立ての工夫・改善が必要である。また、伝える意欲には課題が残っており、自信をもたせる取組が必要である。

#### (3) 子供センタード

高学年の授業研究会への参加や各学年の算数アップ（教師への評価）によって得られた児童の声がどのように授業改善に役立ったのか検証する必要がある。

#### (4) 一人一人が主体となる授業研究会

特に授業研究会の在り方に関して、授業者への質問や本時の授業について深めていく内容に終始してしまっていたことがあったため、職員自身の実践例を話したり、自分がどう授業改善していくか考えたりする研究会にしていく。

#### (5) 次年度への展望

「熊本の学び」で研究を進めたこの2年間で、一定の成果と課題が出てきた。次年度は、その成果と課題を踏まえ、本校がこれまで取り組んできた研究を重ね合わせ、子供たちの声や思いを大切にしながら、よりよい研究としていきたい。

#### 1.1 研究成果の普及

引き続き公開授業（自主発表）を実施することで本校職員の授業力向上につなげていく。そのことが子供の力を高めることにつながるよう研究を進めていきたい。